



1926年の十勝岳噴火は後に三浦綾子氏が『泥流地帯』として、復興を描いている。



「土の館」

を甦らせようと客土を繰り返し、最上部の現代の土層となった。その作土層に、どん底から雄々しく立ち上がっていった人々の強い意志を汲み取ることができる。世界に類を見ない標本である。

2 番目の棟は「農機具伝承館」A棟、B棟で、北海道に初めて導入された80年前の鉄車輪トラクタや100年前の実働するカナダ製の蒸気式トラクタなど歴史を伝える世界のトラクタ80台が並ぶ。トラクタ博物館の規模では世界一だ。

眼前に十勝岳を望み、背後に先人の眠る丘を持つこの地は、農業に生きる人々の「土の拠点」となった感がある。

十勝岳の噴火と泥流

1926（大正15）年5月24日午後4時17分、大雪山系の十勝岳（標高2077m）が大爆発を起こした。この爆発により中央火口丘一帯が破壊され、火山灰は空を覆い、溶岩は積雪を溶かして泥流となって、火口から2・8km下の鉱山事務所までわずか1分間というおそろべき速さで下った。

泥流はさらに美瑛川、富良野川にわかれて流れ、家屋、橋、鉄道などを破壊し、25km離れた富良野原野を埋め尽くすのに25分間しかからないという物凄さだった。

この泥流により死者、行方不明者は144人、家畜は64頭が死に、建物全壊、流出372戸、田畑流失740ha、被災者は1500人余り、損害額は256万円という

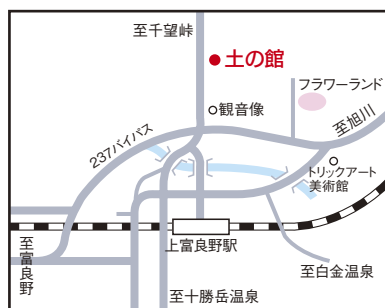
自然災害ではかつてない未曾有の惨事となった。

この災害と復興をモデルにしたのが三浦綾子の小説『泥流地帯』である。

：地底を削るような激しい音を立て、泥流は滔々と流れている。助けを求めて人が流れる。どこかの家が山際に突き当たって、バリバリと壊れる。馬も幾頭も流れて行く。丸太が流れて行く。：

十勝岳は活火山で、それ以前にも1857（安政4）年と1887（明治20）年に爆発があり、これ以後にも1962（昭和37）年6月29日と30日に2度、爆発が起こり、噴火口付近で硫黄採取中の作業員ら5人が死んでいる。

Data



●お問い合わせ先

上富良野町教育委員会

Tel. 0167-45-5511

土の博物館「土の館」

Tel. 0167-45-3451

開館日：5月1日～9月30日 無休

10月1日～4月30日 土・日・祝

日、年末年始休館

開館時間：10時～16時